



TITLE:

元代の儒學提舉司：江浙儒學提舉を
中心に

AUTHOR(S):

櫻井, 智美

CITATION:

櫻井, 智美. 元代の儒學提舉司：江浙儒學提舉を中心に. 東洋史研究
2002, 61(3): 459-488

ISSUE DATE:

2002-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155442>

RIGHT:

元代の儒學提舉司

——江浙儒學提舉を中心に——

櫻井智美

はじめに

一 人物及び遷轉

(一) 江浙行省治下の儒學提舉

(二) 任官者についての分析

二 諸機關との關係

三 杭州路下の出版と儒學提舉司

おわりに

はじめに

「元代の制度はややこしい」というのは、この時代の制度について些かなりとも觸れた者の率直な印象であろう。その原因は、傳統的・中國的衙門名の裏にある「モンゴル」的要素や、制度の奥に潜む人物關係をも考慮に入れなければならぬからである。また、『元史』の本紀と志の記述に矛盾を發見することもしばしばである。本稿で扱う儒學提舉司もその例外ではなく、基本的な沿革や職務についてさえ、はっきりとしない部分があった。以前筆者は、書畫家として有名な趙孟頫について論じた際に、彼が長期間にわたって任官した儒學提舉司が元代の知識人の活動にとって重要な位置を占め

る可能性を指摘し、彼との関わりからごく簡単にその役目をあげた。⁽¹⁾その後、儒學提舉司については、制度史や文化史の側面から李治安氏や宮紀子氏が考察を行い、いくつかの重要な職務が明らかになってきた。⁽²⁾筆者も、最近の諸研究を踏まえた上で、儒學提舉司の全體像の解明を目的として、まず、その組織の起源と變遷について論じた。⁽³⁾その結果、儒學提舉司の起源が、北宋徽宗年間に設けられた提舉學事司にあること、南宋では監察官が學校監督の役目を兼任したこと、モンゴルの江南接收後に道を單位として設けられた儒學提舉が南宋の制度を直接踏襲したものであることなどが明らかになった。一方、華北に見られる提舉學校官は、金代に地方官が兼任していた同名の官に由來することもわかった。

本稿では、儒學提舉司について、資料が最も豊富な江浙等處行中書省地域を主対象として、三章をたてて考察を行う。第一章では、どのような人物が儒學提舉に就任したのかを明らかにし、第二章では、儒學提舉司と他衙門との關係について述べる。第三章では、儒學提舉司について追究すべき課題の中から、杭州路下の出版と儒學提舉司の關係をとりあげて解説を加えたい。本論に入る前に、多くの先論でもあげられる儒學提舉司に關する基本史料を提示しておこう。『元史』卷九一「百官志七」儒學提舉司の條には、

儒學提舉司、秩是從五品。各處行省署する所の地、皆な一司を置き、諸路・府・州・縣學校の祭祀・教養・錢糧の事、及び著述・文字を考校・呈進するを統ぶ。司ごとに提舉一員、從五品、副提舉一員、從七品、吏目一人、司吏二人。

とあり、各行省の所在地に置かれた儒學提舉司は、各級地方學校における祭祀・教育・錢糧のこと、そして、著作物の校訂や官廳への呈進など諸事務を司つたとされる。⁽⁴⁾これは、同時代史料が述べる責任範圍ではあるが、『經世大典』編纂時の認識によっており、また、百年近く存在した衙門の説明としては簡単に過ぎる。⁽⁵⁾本稿の目的は、具體的な事例を根據にして元代の儒學提舉司の立場をできるだけ明確にすることである。

一 人物及び遷轉

(一) 江浙行省治下の儒學提舉

本章においては、現在まで管見の及ぶ範圍で、江浙行省の儒學提舉・副提舉になった人物各四二人と三三人について、その任官年代を探った結果についてまとめる。⁽⁷⁾人物ごとに、官名（道の場合のみ。できるだけ資料の表記を用いる。就任しない場合は明記）・任官年代・出身地・生卒年（任官年と區別するため西暦を用いる）・遷轉（某官から、某官へ）・主な参考資料（紙幅の都合で輯撰者・版本はできる限り省略する）を整理し、年代の絞り込みなどについて、特に解説を加える（出典を略す場合は主な参考資料による）。その際、任官年がわかる範圍で古い順に並べるが、連續する同道の任官者はできるだけまとめる。また、年代が全く不明の者は、最後に前後を勘案しながら列挙する。⁽⁸⁾

提舉

・葉李（浙西道儒學提舉、至元一四一—一四四年、杭州、一二四二—一九二、布衣から、尙書右丞へ、『元史』一七三）彼の儒學提舉就任の経緯については前稿で節を設けて詳細に述べたので、ここでは繰り返さない。⁽⁹⁾

・范震（浙西道儒學提舉↓江浙等處儒學提舉、至元二三—二六頃—、鎮江丹徒（本貫は順德唐山）、⁽¹⁰⁾湖廣等處儒學提舉へ、

『至順鎮江志』一九）「平章奥魯赤引見鎮南王、與語悅之、因與俱見世祖皇帝」とあり、それが出仕のきっかけとなっている。『元史』卷一三二「奥魯赤傳」によれば、アウルクチは至元二三—三年に湖廣行省の平章政事となり、この年の四月に上見して、鎮南王トゴンに従って交趾遠征にでることを命じられた。遠征から歸ると、江西行省の平章政事に移り、至元二六—二六六年に平章政事を辭している。また、同書本紀には、至元二五年三月に、トゴンとアウルクチが軍を引き上げた

記事が見える。范震が浙西道儒學提舉を特授されたのは、早くても至元三年四月、⁽¹¹⁾ そうでなければ至元二五から二六年のことになる。

・葉汝丹（提舉松江儒學、國朝混一、松江華亭、一二一八—一二九三、入元、不仕へ、『西巖集』二〇）一年もせずに退いた。路の提舉學事に性格が近いだろう。

・趙崇霄（浙東道提舉、至元一六年、福建、『廟學典禮』一）南宋の提舉學事官からの横滑りだろう。⁽¹²⁾

・田希亮（浙東儒學提舉、至元一九年、『延祐四明志』一二）

・孫朝瑞（温州路儒學提舉、至元年間、杭州昌化、杭州路提舉から、『國朝文類』六九「陳孝子傳」）『成化杭州府志』卷三九「人物」に、「咸淳四年陳文龍榜」として「孫朝瑞、昌化人」とある。『萬曆杭州府志』卷九では「孫朝端」と誤る。李浩（江東道儒學提舉、至元三年頃、鎮江、湖廣儒學提舉へ、『至順鎮江志』一九）至元三年に「行藝高尚之士」が求められた際に、⁽¹³⁾ 當地から選ばれて就任した。『至正金陵新志』卷二二の最後の一條にあたる「泰繹山碑下續刻」にも彼の名前が見え、「儒學提舉」とされる。湖廣儒學提舉へ異動した時期は不明である。

・葉必茂（福建道儒學提舉？、就かず、兵戈横放、邵武泰寧、『莆陽黃仲元四如先生文稿』四）蒲壽庚より推薦を受けた。・何逢原（福建儒學提舉、辭して赴かず、至元二〇年代、建德分水、不仕から、『萬曆嚴州府志』一五）程鉅夫の薦めを受けたが斷った。參考資料や『宋季忠義錄』卷一二には「御史程文海」の推舉を受けたとあり、程鉅夫が「御史」と呼ばれるのは至元二三年以降である。

・譚文森（福建道儒學提舉、至元二〇年代、常州宜興、廣東道提刑按察副使から、江西等處儒學提舉へ、『吳文正公集』八七）

・陸大猷（就かず、元初、江陰州、『梧溪集』五）バヤンの薦めを受けたが就かなかった。

・樊萬（元初、處州縉山、應奉翰林文字から、終、『宋元學案』八二）

・范霖（成宗即位頃、處州縉山、一二五八—一三二一、翰林編修から、江西提學へ、『梧溪集』四）『兩浙金石志』卷一三「元嘉興路重修儒學碑」には「（缺字）浙等處儒學提舉范霖篆蓋」とあり、この碑の立碑は大徳四年以降である。儒學提舉が各行省に一人という原則に立ち、次の趙孟頫が大徳三年に就任したのは動かしがたいと考えれば、缺字の部分に「前江」の字が入るのではなからうか。

・趙孟頫（大徳三年—一〇年、湖州、一二五五—一三二三、集賢直學士から、翰林侍讀學士へ、『松雪齋文集』附録）大徳一〇年までとするのは、一一年正月に立った碑文に彼が「前江浙等處儒學提舉」と署名しているのによる。⁽¹⁴⁾

・武乙昌（至大元年頃、『註唐詩鼓吹』序）臺灣國家圖書館藏本武乙昌序には、「至大戊申（元年）浙省屬儒司、以是編録之梓、僕寔董其事」とあるところから推測する。⁽¹⁵⁾『程雪樓先生文集』卷一一所載、大徳五年の「重修南陽書院記」にも、武乙昌が儒學提舉であつたとされるが、南陽書院の所在地が江陵であるから、河南江北行省の儒學提舉であらう。

・鄧文原（至大三年—皇慶元年、杭州（其先蜀人）、一二五九—一三二八、翰林修撰から、國子祭酒へ、『吳文正公集』六四）

・柯謙（延祐初、台州仙居、一二三四—一三〇二、饒州路餘干州判官（上らず）から、終、『張文忠公文集』一二二）以前、副提舉にも就任したことがあつた。延祐六年に卒した。

・趙孟頫（延祐六年頃、湖州、『兩浙金石志』一五）趙孟頫の弟。

・張瑛（泰定二年以前、恬退として報ぜず、杭州錢塘、一二六〇—一三三五、『伊瀆集』二四）泰定二年に卒したため、それ以前であることに間違いないが、詳細は不明。

・楊剛中（泰定年間、集慶上元（其先松陽人）、江東廉訪司照磨から、翰林待制へ、『至正金陵新志』一三下）次の楊敬惠の就任時期からは、泰定三年には退任していたと思われる、また、天曆二年の時點ですでに翰林待制であつた資料もある。⁽¹⁶⁾

・楊敬惠（泰定三年、台州臨海、翰林應奉から、『國朝文類』三六）

・吳善（至順年間—元統年間、饒州安仁、集賢待制から、終、『牧庵集』序）『中庵集』にも儒學提舉の肩書きをおびる吳善の序がある。『牧庵集』序は至順三年のもの、『中庵集』は元統二年のものである。

・余謙（元統二年—後至元年間、池州、翰林應奉から、『兩浙金石志』一六「元西湖書院重修大成殿碑」）元統二年に翰林應奉であつた余謙が儒學提舉に赴任してきたとされる。また、次の黃潛との重複がないとすれば、後至元年間に退任したと考えられる。『萬曆杭州府志』卷九では、世祖の「至元五年」とされるが、その根據は不明である。

・黃潛（至正元年頃—三年、婺州義烏、一二七七—一三五七、國子博士から、祕書少監へ、『金華黃先生文集』卷末）『國朝文類』卷頭に「至正元年十一月二十二日准本司提舉黃奉政關」とあり、至正元年には赴任していることがわかる。⁽¹⁷⁾

・班惟志（至正三年頃—六年頃、汴梁、常熟知州から、集賢待制へ、『金石文考略』一五）參考資料所載、及び『金石萃編未刻稿』卷下に録文される至正三年二月立石の「武林弭災記」には、「奉政大夫江浙等處儒學提舉班惟志篆蓋」とある。また、『錢塘先賢傳贊』の彼の序文には、「時至正丙戌上巳日奉政大夫江浙等處儒學提舉班惟志謹識」の署名があり、これは至正六年にあたる。『萬曆杭州府志』卷九では「至正二年」とされるが、そうであれば先の黃潛と重なり矛盾する。

・段天祐（至正中期、汴梁蘭陽、翰林應奉から、終、『輟耕錄』七「孝感」）至正八年には國子助教で、それから二遷して任命された。『萬姓統譜』卷一〇一では、「未任而卒」とある。『萬曆杭州府志』卷九で「泰定間」にかけられるのは誤りである。

・王大本（至正一五年、台州寧海、國子博士から、『兩浙金石志』一八「杭州路重建廟學之碑」）參考資料は、彼が撰した至正一五年の立石の碑である。『萬曆杭州府志』卷九は「至正二年」とする。

・宇文公諒（至正中期、湖州歸安、一二九二—、國子監丞から、嶺南廉訪司事へ、『元史』一九〇）至正一五年には、まだ國子監丞であつたことから、その直後の時期だと考える。『萬曆杭州府志』卷九で「文宗至順間」とされるのは誤り⁽¹⁹⁾

である。

・楊翻（至正二年、集慶上元、終、『成化杭州府志』一三）楊剛中の子。「二十二年、守夏思忠盡購禮佛寺基南北二百步東西一百六十步新之、翰林待制孟昉撰記、江浙儒學提舉楊翻爲碑」、及び「元江浙儒學提舉楊翻重建廟學碑」とある。

・鄭元祐（至正二四年、處州遂昌、平江路學教授から、卒、『僑吳集』附録⁽²⁰⁾）

・趙友蘭（至正年間、台州黃巖、終、『元詩選癸集』丙）

・張擇（元末、湖南（其先平陽、富揚州）、終、『梧溪集』五）「以晦迹擢江浙提學」とあり、元に任用されたのはこれが最後であった。⁽²¹⁾

・胡世佐（元末、台州、『蔡陽外史集』三五「書春秋捷徑後」）明に入って「江浙儒學提舉」と呼ばれた。

・陳德永（時期不明、台州黃巖、終、『宋元學案』八二）

・朱文鑑（福建儒學提舉、至正年間、興化莆田、『宋文憲公全集』三四）

・朱本（福州路儒學提舉、至正年間、龍興豐城、『千頃堂書目』一）

・蕭誼（福建儒學提舉、至正年間、吉安太和、『萬曆泰和志』一〇上）

・陳顯會（福州路儒學提舉、至正年間、常州無錫、翰林修撰へ？、『經濟文集』四）

・潘從吾（福建儒學提舉、至正中期以降、台州黃巖、『弘治赤城新志』一〇）

・程世京（福建儒學提舉、一至正二六年、建昌南城、翰林應奉から、集賢修撰へ、『閩中金石略』一一）程鉅夫の孫。至正二六年に集賢修撰へ遷したという『元人傳記資料索引』に従う。

・卓説（福建儒學提舉、至正二七年頃、『善本書室藏書志』二九）阿部一九七六によれば、臺灣中央研究院藏の『豫章羅先生文集』に「至正二十七年龍集丁未正月庚辰福州福建等處儒學提舉卓説序」とある。

・張本（福建儒學提舉、時期不明、延平將樂、一二九八一、終、『倪文僖公集』二二六「明故奉議大夫同府長史張公墓表」）

元統元年の進士で、それ以降であろう。ただ、息子の墓表に書かれた職名であり地方志には書かれていないため、疑わしい面もある。⁽²²⁾

副提舉

- ・盛際（浙西道儒學副提舉、居鎮江（其先杭州餘杭）、至元一五年以降、終、『至順鎮江志』一九）
- ・陳立武（浙西儒學副提舉、至元一九年頃、『吳郡文粹續集』二三）
- ・朱子昌（浙西儒學副提舉、元貞元年頃、温州平陽、『吳郡文粹續集』六）
- ・李鎮（江東道儒學副提舉、至元二二年頃、鎮江金壇、『至順鎮江志』一九）儒學提舉李浩の兄。⁽²³⁾至元二二年の崔彥の求賢によって任用された。
- ・陳友龍（元貞元年、温州永嘉、『廟學典禮』四「設立隨省儒學提舉司」）參考資料は、儒學提舉司を道單位から行省單位で一衙門に減らすことを命じたものであり、それを、行省單位の新衙門の儒學副提舉として受け取った。『松郷集』卷一「重建文公書院記」には、「皇上（成宗）嗣大歷服、播告中外勉勵日加。明年置各省提舉以敦教事。永嘉陳君友龍以朝廷首選寔來江浙、始至起士林于家、俾復文公書院于奉化之陽」とあって、併合を機に招かれたことがわかる。⁽²⁴⁾
- ・柯謙（大德年間、台州仙居、一二五一—一二一九、翰林檢閱官から、溫台檢校所大使、『張文忠公文集』二二）のち提舉にも就任した（提舉の項目を参照）。

- ・陳公舉（大德一〇年、婺州浦江、翰林應奉へ、『欽定天祿琳琅書目』一「春秋分紀」）『春秋分紀』の宋刻元刊本には、「大德十年、江浙等處行中書省奉中書省取備國子監書籍、令儒學副提舉陳公舉校勘申解。」という書きつけがある。
- ・白珽（至大間—皇慶間、杭州錢塘、一二四六—一二三八、常州路教授から、淮東鹽倉大使（未任）へ、『宋文憲公全集』一九）副提舉就任當時、「時鄧文肅文原實爲長、與先生志氣脗合、舉刺得時宜、文化大行」とあって、提舉鄧文原と時

期が重なる。また、白珽自身の『湛淵集』『大易集說序』に、「皇慶元年春將仕郎江浙等處儒學副提舉白珽序」という署名があり、當時任官していたのは確實である。

・張理（福建儒學副提舉、延祐中、臨江清江、『嘉靖臨江府志』七）『千傾堂書目』卷一「易象圖說」では「舉茂材異等爲福建儒學提舉」とあり、それを踏襲して提舉に就任したとする資料もあるが、地方志の記述に従いたい。

・孔灝（泰定年間以降、衢州、一三〇〇—一三六一、湖北廉訪司書史から、海陽縣尹へ、『宋文憲公全集』四二）

・龔璠（—至順二年、鎮江（寓吳中）、一二六六—一三三一、宜春縣丞から、終、『金華黃先生文集』三三）「遂以從仕郎江浙等處儒學副提舉致仕、命下、先生已卒于宜春」とあり、實際には赴任していない。

・程榮秀（元統元年以前、徽州休寧、一二六三—一三三三、終、『新安文獻志』七一）提舉に就任したとする資料もあるが、墓志銘による。

・吳直方（未だ上るに及ばず、元統二年から後至元二年のある時期、婺州浦江、一二七五—一三五六、中政院長史へ、

『宋文憲公全集』四一）

・陳旅（元統二年—後至元四年、興化莆田、一二八七—一三四二、國子助教から、翰林應奉へ、『元史』一九〇）

・陳邁（後至元末—至正三年頃、台州臨海、一二九六—一三四四、慶元路知事から、江浙行省員外郎へ、『金華黃先生文集』三八）提舉の班惟志が篆額を擔當した至正三年の「武林弭災記」を正書した。「文林郎江浙等處儒學副提舉陳邁書」とある。

・李祁（至正四年—六年頃、茶陵、一二九九—、婺源縣同知から、終、『金華黃先生文集』一〇「杭州路儒學興造記」）「四年夏儒學提舉班公志方俾之度木簡材、而李君祁來爲副提舉」とあり、李祁は、提舉班惟志の任期途中で陳邁と交替した。『萬曆杭州府志』卷九で「至正五年」とするのは正確でない。また、至正六年一月立石の『兩浙金石志』卷一七所收「元嘉興路興學學校碑」には「承務郎江浙等處儒學副提舉李祁書」とある。

・劉基（至正七年頃、處州青田、江西省掾から（投効の後）、浙東元帥府都事へ（また投効の後）、一三一—一三七五、『誠意伯文集』巻首）「後爲江浙儒學副提舉、爲行省考試官」とあり、行省で鄉試を行った年（至正なら元年から三年刻み）と、次の浙東元帥府都事についた至正二二年を考慮し、七年頃と考える。⁽²⁵⁾

・裴夢霆（至正一一年、未だ行かず、臨江清江、『嘉靖臨江府志』七）進士に登第して任命されたが、兵變に備えて義兵を募った。

・魯淵（—至正一四年頃、建德淳安、華亭縣丞から、終、『萬曆嚴州府志』一六）江西副提學とする資料もあるが、單純な間違ひであろう。

・錢惟善（—至正一六年、杭州錢塘、終、『萬曆杭州府志』七五）張志誠が平江（蘇州）に據ったため隱居した。

・洪欽（至正一九年頃、溫州、嘉興路儒學教授から、終、『兩浙名賢錄』二二）『玩齋集』巻七「重修西湖書院記」には、「江南浙西道肅政廉訪使丑的公重修杭州西湖書院成、郡監完者帖木兒・哇哇守社從庸謝節、提學馬合謨・洪欽以士人宋杞等狀來請文」とあり、至正一九年に完了した西湖書院重修の記念碑執筆を貢師泰に依頼している。「提學馬合謨」の意味については、今のところ不明。

・葉廣居（至正二五年、嘉興（寓杭州）、終、『禮經會元』序）「至正二十五年八月吉日、六世孫將仕郎江浙等處儒學副提舉葉廣居百拜謹識」とあり、同書陳基序には、「公裔孫今江浙儒學副提舉廣居奉遺稿獻之、江浙行中書右丞榮陽潘公命刻諸梓、且寓書俾余序其篇端」とある。

・楊彝（至正二六年、杭州、『兩浙金石志』一八「元鄞縣重修儒學碑」）至正二六年の碑に「將仕佐郎江浙等處儒學副提舉制河楊彝書」という署名がある。『兩浙金石志』の撰者阮元は、この職が方國珍から授けられたものではないかとする。

・李桓（至正年間、集慶、終、『元史』一九〇）李恆とする資料もある。提舉楊剛中の甥。『江寧金石記』巻七所載、至正二年立石の「重建清源廟碑銘」には「將仕佐郎寧國路南陵縣主簿李桓撰」とあり、それ以降であることに間違ひない。

・方濬（赴かず、至正年間、台州臨海、一三〇七—一三六六、『宋文憲公全集』三四）
 ・龍仁夫（就かず、時期不明、吉安永新、一一三三五、『元史』一九〇）のちに陝西儒學提舉・湖廣儒學提舉に就いた。
 ・徐一清（時期不明、婺州蘭溪、江浙行省郎中へ、『永樂大典』三五二八「麟溪集」『萬曆杭州府志』卷九では、字の「永之」を用いて「世次無考」の「提舉」に誤る。おそらく、『輟耕錄』卷五「先輩謙讓」の「徐永之先生爲江浙提舉」という記事による。

・劉希賢（時期不明、慶元鄞縣、會稽縣學教諭から、終、『兩浙名賢錄』二二『千頃堂書目』卷二にも記録される。

・鄧衍（未だ任ぜずして卒す、時期不明、杭州、『元史』一七二）鄧文原の子で、父の死後、恩蔭により授けられた。

・陶宗暹（時期不明、台州黃巖、終、『書史會要』七）陶宗儀の従弟。

・聞人夢吉（福建儒學副提舉、力辭す、至正一八年頃、婺州金華、一二九三—一三六二、泉州路學教授から、慶元路知事へ（上らずして卒す）、『王忠文公文集』（北京圖書館古籍珍本叢刊九八）二四）至正一八年九月に李國鳳は江南を「經略」する命を受けて江南に赴いた。⁽²⁶⁾ 彼は李國鳳の拔擢を受けたが、辭退した。

・王厚孫（福建儒學副提舉、赴かず、至正中中期以降、慶元鄞縣、一三〇〇—一三七六、邵武路教授（赴かず）から、終、

『清江貝先生文集』三〇）王應麟の孫。

・龍雲從（福建儒學副提舉、元末、吉安永新、江浙行省都事から、終、『定宇集』一七「龍廬陵增廣通略序」）時期は不明だが、「前福建等處儒學提舉廬陵龍雲謹序」とある。龍從雲とする資料もある。

（二）任官者についての分析

まず、江浙行省下の儒學提舉任官者について、その特徴を述べ、その後儒學提舉全體についても分析を行っていききたい。江浙等處儒學提舉の就任者に關しては、つとに明代の地方志に記述があった。しかし、『成化杭州府志』卷三七「名宦」

では、趙孟頫・楊剛中・段天祐・陳旅・余謙・黃潛・李祁・李桓・王大本・洪欽の一〇人をあげるのみである。また、『萬曆杭州府志』卷九「會治職官表二」では、提舉一九人・副提舉一三人をあげるが、前節の各人の條で指摘したとおり、その年代比定にはかなりの誤りが含まれる。⁽²⁷⁾明代の地方志だけに記録される人物を採用しなかったのは、そのためである。さて、前節の一覽からまずわかるのは、江浙行省内における任官が、儒學提舉一員・副提舉一員という原則にきちんと沿っているという點である。つまり、同じ時期に二人以上が重ならないという原則に従って考えると、時期の比定も矛盾なく行うことができる。ただし、初期には道(時には路)を單位とする儒學提舉が配され、行省内に複數が同時に任官することがあった。このような状態は、行省單位に移り變わる成宗即位を契機として見られなくなる。また、福建道については江浙行省とは別に儒學提舉が任命された時期もあり、福建地方が所屬する地方行政單位の變化や元末における當地の獨立性を反映している。⁽²⁸⁾また、何も問題がなければ就任してから三年ほどで交替する人物が多いこともわかる。元代の儒學提舉の遷轉に關する規定を直接明示する資料は残っていないが、ここから、一般の外任官と同じく三年を一考としていたであろうことが推測できる。

次に、任官した人物の傾向をあげていこう。まず、提舉・副提舉とも、出身地について明確な特徴を見出すことができる。注目すべきは、ほとんどの人物(八割程)が江浙行省内の出身者である點で、その中でも明確な地域偏差が見られる。杭州路の出身者は時期を限らず多く(七人)、婺州路(五人)・處州路(四人)・湖州路(三人)・溫州路(三人)など杭州に比較的近い地方の出身者も目立つ。また、初期には鎮江路の(四人)、後期以降には台州路(一〇人)の任官者が多く、それは、鎮江が元初に江南支配確立の足場になっていた状況、そして、元末から浙東出身者が政治の舞臺に進出していく状況を、直接反映する結果になっている。

彼らの具體的な昇進ルートについてはどうだろうか。まず、副提舉から見えていくと、實際に就任していない者六人を除くと、最終の履歴として任官するものが四割程と最多である。前任衙門としては、路學教授(正九)を初めとする學官が

最も多く、縣丞（正八）など下級地方官も見える。ここから、儒學副提舉ポストは、正七品と官品は低いが、一般的な學官が昇進・異動を繰り返して最後にたどり着けるかどうかというところにあったとわかる。⁽²⁹⁾一方の儒學提舉については、翰林應奉（從七）から遷轉した者が最も多く、それ以外でも翰林國史院・集賢院・國子學などの中央官であった者の割合が大きい。また、儒學提舉就任後は、他地方の儒學提舉へ移った者や、翰林國史院・集賢院の待制（正五）や修撰（從六）に移る者が複数見られるほか、副提舉と同じように、儒學提舉を最後の履歷とする者もいた。このように、中央の翰林院・集賢院・國子監學との人事異動が盛んに行われていたことは、一般の地方行政官の昇進ルートとは異なる儒學提舉の昇進の特徴であった。⁽³⁰⁾また、致仕直前の職官になり得たということが、元初に盛んに行われた推舉の際、名譽ある初任官として儒學提舉・副提舉が授けられた理由でもあった。

ただし、儒學提舉の中で、同官における一般的な異動の傾向とは少し異なる昇進を遂げた者がいることも、併せて指摘しておかなければならない。それは、葉李・趙孟頫・鄧文原の三人である。最初期に布衣から任命された葉李は、かなり長期にわたって儒學提舉の身分を保ち、その後尙書左丞（正二）へ移った。趙孟頫は元來集賢直學士（從四）として赴任し、九年の任官を終えて翰林侍讀學士（從二）へ移っている。鄧文原の後職は國子祭酒（從三）と、中央機關の比較的高い身分に異動した。つまり、江浙行省の儒學提舉のうち代表的な人物としてあげられる三人は、⁽³¹⁾例外的な昇進をしたのである。彼らの昇進には、それぞれ特殊な理由が考えられる。葉李は宋の奸臣を批判した経歴によって特別に取立てられ、江浙儒學提舉に就任した。彼が同職に長く居續け、その後中央の行政に參畫できたのも、彼の持つ背景が影響した。⁽³²⁾趙孟頫についても、葉李と同じような位置づけが可能である。つまり、趙孟頫は南宋王室の末裔として、舊南宋地域がモンゴルの支配下に置かれたことを明示する役割を背負って元朝に出仕していた。次の鄧文原に關しては、その趙孟頫との關係が深かったことから、彼の強力な後押しを受けて中央での地位を得たことは、ほぼ間違いないだろう。このように、彼ら三人はそれぞれの立場で優遇措置を受けていたが、中央へ遷轉していくことに關しては他の儒學提舉と同じであつ

た。つまり、彼らは例外というよりは、むしろ、儒學提舉獨特の遷轉システムの特徴を強調するような存在だったとい得るだろう。そして、江南の出身者が中央官を経て儒學提舉に任官し、また、中央へと還っていくところには、現地出身で、かつ、中央の意向や動靜を見極めた人物を、意圖して儒學提舉に就けようとした支配者側の姿勢も垣間見られるのである。

ひき續き、江浙行省以外の地域について、儒學提舉・副提舉についた人物の任官地と出身地を比較した表を見ながら述べていこう。中書省と一〇の行省で仕官した人数を見やすくは、江浙行省・江西行省・湖廣行省の江南三省の任官者が壓倒的多數を占めることである。遼陽・征東・四川・雲南・甘肅それぞれの行省については、任官した人物がそれぞれの地域で四・五・六・二・二人明らかになったし、皇慶から延祐年間を中心に儒學提舉司設置の記事も散見する。⁽³³⁾

しかし、おそらくそれは、仁宗アユルバルワダ時期の一時的な政策にすぎず、その任官者たちの活動の様子はほとんどわからない。また、『元史』に設置年月の記載がない中書省・河南江北行省については、特別な理由を考えなければならぬ。⁽³⁴⁾さらに、陝西行省の儒學提舉司についても、一三二〇年ごろまでの三〇年弱の間に蕭剌・王天祐・孔弘道の三人しか任じられていない上に、⁽³⁵⁾一人目の蕭剌は實際には辭して就任していない。このような結果から、江南以外における儒學提舉司の運営が、甚だ臨時的なものに止まっていたことがわかる。たとえ史料の偏りや現存史料の不足を計算に入れても、江南三省以外での儒學提舉司の大きな活躍を想定するのは難しく、少なくとも、繼續的な運営は行われていなかったようである。言い換えれば、江南三省こそが儒學提舉司が恒常的に機能した實質的範圍なのであった。

次に、どんな人物が儒學提舉になったのか全體的に考えていきたい。柳貫『柳待制文集』卷一七「提舉司廳壁題名序」には、

秩第五に視うると雖も、而れども校庠序の上に臨據す。曹務甚だ簡たれども、師資繋る攸、館閣掌故の目ありて、聲實の兼ねて茂んなる者に非ざれば、固より宜しく之に居るべき莫し。

表 儒學提舉・副提舉の出身地と任官地（1277—1368年）

出身 任官	中書	遼陽	陝西	四川	河南	湖廣	江西	江浙	他	不明	計
中書	4						1	1			6
遼陽							3			1	4
征東							4	1			5
陝西	5		3				1				9
四川	1		1	1		1				2	6
雲南				1					1 ¹⁾		2
甘肅										2	2
河南江北	2				1			2		2	7
湖廣	2				1	3	4	11		2	23
江西	2			2	2	1	17	12	1 ²⁾	4	41
江浙	3					1	7	60		5	76
不明							1	3		3	7
計	19	0	4	4	4	6	38	90	2	21	188

1) 變理翰 モンゴル（居成都） 2) 丁鶴年 ムスリム（生於武昌）

とあり、儒學提舉は從五品と官秩は低い、その責務は名だたる先達によって果たされたように、館閣にあるべき掌古に優れた者でないと務まらないくらい重大だと述べる。江浙行省以下の任官者だけを振り返ってみても、葉李ら三人だけでなく、黃潛や劉基のように中央の政治に関わっていく人物や、當代の文學を代表する人物が名を連ねている。儒學提舉司は、その名のとおり優れた人材が集まる衙門の一つであったといえよう。再び表に戻って分析を進めると、江浙行省・江西行省出身者の数の多さは、この地域にそのような適任の人物がたくさんいたことを物語る。江浙行省下の儒學・書院における活動が他省に比して最も盛んであることも、その理由としてあげられよう。⁽³⁶⁾ また、遼陽行省や征東行省の儒學提舉司を江西行省出身者が占めているのも印象的であり、人的結合による繼承關係が指摘できる。さらに注目したいのは、モンゴルやその他チャイナパワー外からの任官が極めて少なく、また、出身の行省内で任官する割合が非常に高いことである。このような傾向は、多くの官職の中でも特異で

ある。その特異性を明らかにするために、行省官や路官に關する先學の分析結果と比較してみよう。植松正氏による江南三省の行省官（參知政事以上）の出身分析では、一二七三年～一三〇六年、一三〇七年～一三三二年、一三三三年～一三六八年の三期に分けて統計が行われているが、⁽³⁷⁾各時期を通じて「外民族系」の割合が五〇%を越えており、逆に「南中國」出身者は二割に満たない。第二期が最も極端であり、その割合はそれぞれ六九%と〇、九%になっている。トップクラスの江南の行省官には、江南出身者はほとんど就くことができなかったのである。さらに、太田彌一郎氏による鎮江路官の出身分析も、對照材料としてとりあげたい。⁽³⁸⁾路官の出身地について太田氏がまとめたところによれば、路官についても、ダルガチから總管・同知府事・治中・判官までは江南出身者の任官が極端に抑えられており、推官以下、經歷等首領官に至って初めて地元や近接路出身者が採用されているのがわかる。⁽³⁹⁾江南の地方行政官には「漢人」の官吏が多く、「南人」の就任は極めて少なかったのである。それに比べ、儒學提舉司の任用は、江南三省内で相互の出入りがあることを除き、基本的に現地出身者が任用されている。ここから、儒學提舉司の任用の形態が、江南における一般行政官吏の任用の原則とは全く異なっていたことがわかり、異例の人材起用法が行われたといえる。⁽⁴⁰⁾つまり、儒學提舉司が持つ役割を、現地出身者たち自らに果たさせていたのである。では、儒學提舉司の役割や立場はどのように定められるのか、次章以下で述べていきたい。

二 諸機關との關係

これまでの諸研究により、元代の儒學提舉の職掌については、その輪郭がしだいに明らかになってきた。例えば、李治安氏は、『元史』百官志の記述以外に詳細な傳記が残る柯謙や柳貫などの事績を中心にかけ、儒學提舉が地方官學や儒戸戸籍を掌握し郷試にかかわることなどを指摘した。宮紀子氏は、『四書章圖』出版の具體的経緯を述べて、儒學提舉司と肅政廉訪司が書物の呈進と保舉を行った状況を詳細に論じた。⁽⁴¹⁾前稿では、儒學提舉司が持つ推舉や試験に對する人事

面での権限や、學校の教育から政治や經濟的な側面にわたる職務や權力の背景に、地方學校を管轄する宋代の提舉學事司の性格があつたことを論じた。儒學提舉司の關わる分野は多岐にわたつたが、その役割を總じて言えば、有司などの諸勢力から學校、ひいてはそこに關わる諸人を守る代表者として、當地の學校教育を振興し、學校の内外折衝の一定部分を引き受けて行つていた。⁽⁴³⁾

ただし、儒學提舉司は、學校書院・教育の全ての面にわたつて決定權を付與されていた譯ではなく、彼らが自ら管轄できる範圍にはそれなりの制限があつた。例えば、個人の傳記で賞賛されるのとは違って、多額の費用を必要とする學校や書院の建設や重修に儒學提舉が中心的な立場で關わる例は、相對的には多くない。そして、その建設・重修の記念碑が建てられるにあたり、その碑記の最後に列擧される地域の關係者の欄に、儒學提舉司があげられないことさえあつた。⁽⁴⁴⁾もちろん、儒學提舉が記念碑の撰・書寫や篆額の作成にあたることは多く、確かに、このような撰寫の仕事こそが、才能を生かす場であり、かつ名前を残す機會でもあつた。ただ、莫大な錢糧を必要とする仕事は、有司や監司が實質的に管轄し、組織間で協力して處理すべきものでつたのである。

では、そのような諸機關と儒學提舉司の間には、どのような關係があつたのだろうか。儒學提舉司は、行省直屬の官司として位置づけられながら、第一章で述べたように、中央の文章系統官との相互の人事異動が行われていた。それは、至元二四年に定められた、集賢院と儒學提舉司は中央と地方各々の教育機關のトップであるとする枠組みを前提とし、⁽⁴⁵⁾同じ學校・教育系統の官職として、或いは文章執筆官として、相互に異動していたことができる。さらに、『元史』卷二四「仁宗本紀一」至大四年閏七月丁卯の條に、

完澤・李孟等言えらく、方今儒者を進用するも、而れども老成 日ごとに以て凋謝す。四方儒士の成才の者、請うらくは擢して國學・翰林・祕書・太常或いは儒學提舉等職に任じ、學者をして激勵する所有らしめんことを。と。帝曰く、卿の言是なり。自今資級を限る勿く、果して才にして賢なれば、白身と雖も亦た之を用いよ。と。

とあるところから、⁽⁴⁷⁾國子監・國子學や翰林國史院、祕書監、太常寺などの衙門は、漢文書や儀禮について知識を必要とする點で、儒學提舉司と類似性を持つことがわかる。そのような認識のもと、翰林院、集賢院、國子學などは、儒學提舉・副提舉との相互昇轉ルートになっていたのであった。結果、地元出身の官が中央に任官したのち歸ってきて儒學提舉に就くような事例も多くみられた。同時に、儒學提舉司からの提案は、直接、中央の集賢院や國子監に伝えられるものもあった。⁽⁴⁸⁾文書の移動が明確に規定された元代においては、唐突なルール違反の移文が通常なされたとは考えにくく、人的つながり以外でも、儒學提舉司が地方行政系統の中にありながら、中央の教育・文化機關と直接に深いつながりを有した證左となる。

一方、地方における儒學提舉司の立場は、その職務内容に影響を受けている。制度上は行省のもとに置かれた機關でありながら、監察機關との活潑なやり取りを行っていたのである。それは、提刑按察司及び肅政廉訪司が、元來「⁽⁴⁹⁾勸勵學校」を職務として明記されており、また、發令文書ではない『程雪樓先生文集』卷一一、南陽書院の「題名記」にも、

學校を勸勵するは使臣の職なり。

とあるように、⁽⁵⁰⁾いくつかある督學機關の中でも最も重要な立場にあったということによる。そのため、教育がらみの懸案を解決する過程で、儒學提舉司と監司が接觸を持つのは當然の成り行きであった。そもそも、宋代に作られた提舉學事の任務は、あくまでも監司（監察官）の範疇でとらえられた。華北では、金代から元初にかけて、地方行政單位である路に置かれて地方官的な存在に變化していったのに對し、江南に設けられた儒學提舉司は、南宋の制度を受け繼いで、本來の監司的性格を色濃くのこしていたのである。

そして、具體的には、推薦の場面・學校や書院の建設場面などで、監察系統の官と直接に関わっている。まず、推薦の場面について述べよう。江南の人々が出仕する過程では、監察系統を通しての保舉（歲貢、成材・茂異）や、華北から赴任してきた官僚たちによる推舉が、大きな轉機となる場合が多く、そのため、儒學提舉は人材を推薦する役割を持っている

といつても、彼らの推薦のみで高官にのぼる道が開ける譯ではなかった。實際には、推薦の大きなシステム中で、學校に最も近いところで個人と諸機關を結びつけていた。そのような立場は、自身が推薦を受けて儒學提舉に就く場合にも反映される。『滋溪文稿』卷八「元政集賢學士國子祭酒太子右諭德蕭貞敏公墓誌銘」には、

故贈咸寧貞獻王野仙鐵木兒 親しく學を許文正公に受け、深く治國用賢の説を知り、陝西行省平章と爲るに及び、公並びに故四川憲副劉季偉の姓名を朝に登ず。會ま參政趙彥澤 提舉學校官を立つるを請い、公を薦めて其の選に當つ可しとす。之を久しくして、制下り、公に承務郎・陝西儒學提舉を授く。蓋し貞獻王及び趙公の言に従うなり。省憲公の職に就くを請うも、公書を以て辭して曰く、……

とあつて、ここでは、行省と憲司とがともに就職を勧めているのがわかる。他の儒學提舉経験者がその職に就くことになった経緯をみても、その推薦者の身分は憲司・監司の官、集賢官などの中央文書關係官、行省官など多岐にわたっている。有司・憲司兩方に直接關わるような、儒學提舉司の立場を反映していたのである。

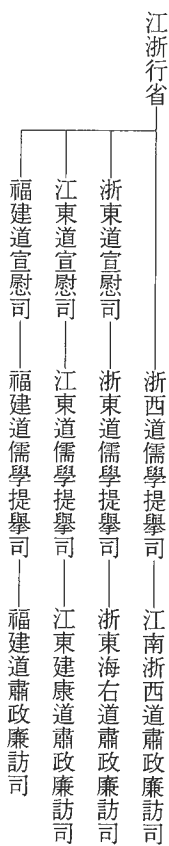
人事の場面だけではなく、儒學提舉が行つたと賞賛される建設や重修も、多くの官廳と直接交渉を持つ中で、實行に移されていった。例えば、戴表元『剡源集』卷一「和靖書院記」においては、

元貞丙申冬、部使者曹南の完顔公貞 越を按ずるに、門下に詣りて言う有り、曰く、……。公之を聞き興りて曰く、豈我に在らざらんや。と。即ち其の事を學官に屬し、學官は以て提舉學事に聞し、以て郡若くは宣慰司に諺げ、以て省府に上し、報下ること請の如し。

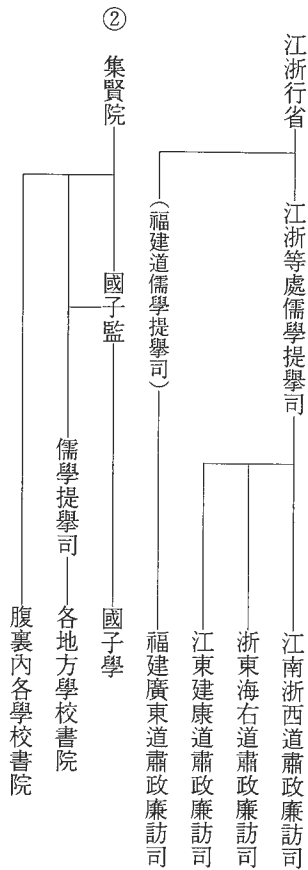
とあり、監察御史は書院の建設の要請を受けると、ただちに學官に委嘱し、それが儒學提舉へと傳えられた。儒學提舉は有司や宣慰司へ文書を送り、その案件がさらに上層機關に傳達されていく様子が明らかになる。このように、當地を訪れた監察官が、學官や儒學提舉からの上申を受けて學校・書院の荒廢を知り、方々からお金を集めたり、當地の有司と協力したりして建設を行う例は枚舉に暇ない。

このような様々な場面における儒學提舉司と他機關の關係を、江浙行省を例にとり、わかりやすく簡略化して圖示してみたい。①、②については必ずしも上が上位ということではなく、儒學提舉司がどの衙門とやり取りがあるのかを示したものである。

① 元貞元年五月省併以前（至元二九年の例）



② 元貞元年五月以後



①と②は地方において儒學提舉司が行省の直轄機關でありながら、實際には、宣慰司や提刑按察司・肅政廉訪司との移文を行っていたことを示している。元貞年間に行省單位に減らされて以降は、肅政廉訪司よりも廣い範圍を管轄することになったために、自分より管轄範圍が狭い肅政廉訪司へ申文をのぼすという、變わった移文が行われる場合もあった。②は

中央諸機關との關係である。中央の集賢院が教育管轄機關としてトップに立ち、そのもとで國子監と儒學提舉司が中央と地方を擔當する。ただし、品秩の違いから、儒學提舉は國子監にも申文を送る立場にあつたことを示した。つまり、この圖から、儒學提舉司は、役所の規模に比して、かなり廣い管轄範圍・移文の範圍を持つた様子が看取できるだろう。

ところが、そのような管轄範圍の擴大とは逆行する局地的な活動の深化も見られた。つまり、實際の活動を細かく見ていくと、江浙行省の場合、一方で行省の全體を見渡しながら、他方で官廳の所在地である杭州路の路學や西湖書院と、特別に密な繋がりを示しているのがわかる。例えば、至正年間に二度行われた杭州路學の重修に際して、儒學提舉が二度とも記念碑の文章を提供している。⁽⁵¹⁾また、『兩浙金石志』卷一四「元加孔子號詔碑」は、大德一年の「加封孔子制誥」が西湖書院に建てられた經緯を述べ、⁽⁵²⁾

皇元大德丁未、始めて大成の號を加うるは、其れ褒稱の隆蔑を以て尙ぶを致す所以なり。後二十九年、儒學提舉臣余謙・副提舉臣陳旅 謂えらく、名詔の它の郡邑學院に頒せられ、皆な諸を石に勒するも、而れども茲獨り缺く。と。

是に於て、臣謙 隸古を爲して之を書き、刻して廟門に樹てしめ、用て休命を揚げ、無窮に昭示す。厥れ惟うに憚るかな。至元二年丙子歲秋九月甲子、西湖書院山長臣陳泌 拜手稽首して謹んで書す。

とする。大德一年の二九年後、すなわち後至元二年頃、各地で見られる「加封孔子制誥」の碑を、儒學提舉が中心となつて、杭州にも建てた様子がわかる。ここからは、儒學提舉が廣域の儒學・書院（學院）を管轄しつつ、特に力を注いだのは治所のある杭州であつた状況があらわれている。また、同書卷一六「元西湖書院重修大成殿碑」には、

元統二年秋、大成殿東南角壞る。……翰林余公謙・國子助教陳公旅、江浙の學事を提舉し、蓋し深く之を憂う。至元元年乙亥秋、魯郡胡公祖廣、江西行省參知政事より來りて肅政廉訪使と爲る。凡そ工價の未だ庚わざる者、日ごとに庭に訴え、乃ち提舉に詢ぬ。提舉其狀を胡公に白すに、疊然として以て己の任と爲し、即ち眞定萬戶府鎮撫符公倫に檄して、……。時に浙東道宣慰使鐵木哥公來りて憲司の事を監し、治書侍御史衛郡李公嘉賓江浙省事を參知す。胡公

之と與に謀りて、儒司をして浙右郡縣學書院の羨財を以て之を助けしむ。……

とあつて、江浙出身の余謙と陳旅が中央から戻つてきて、有司・憲司と協力して重修にあたる様子が述べられる。彼らは、儒人たちを代表して諸機關と交渉していく役割を、明らかに背負つていたのである。

三 杭州路下の出版と儒學提舉司

前章ですでに指摘したように、儒學提舉司の影響力はその官廳の所在地において極端に強かった。それは、杭州路下の建設のみにとどまらず、官が關わる出版という側面からも指摘できる。儒學提舉司が出版に關わることについては、先行研究で論證されているので、⁽⁵³⁾ここでは、杭州路下の出版に絞つて述べてみたい。まず、周知の史料ともいえる『國朝文類』卷頭の命令文を例にあげよう。注目したいのは、後至元二年二月の日づけが見えるこの命令文において、當時江浙儒學副提舉だった陳旅は、

憲司合下に仰せて照驗し、本司副提舉陳登仕に委自し、本職を妨げず、校勘繕寫し施行せられよ。

とある江南浙西道肅政廉訪司の指揮を受けた後、引き續き同じ内容の劄付を行省から受け取った上で、校勘作業・印刷の責任を擔つたことである。この過程では、儒學提舉司が行省と廉訪司兩方の命令を受け取っている。同時に、杭州路にある西湖書院と儒學提舉司との關係も浮かんでくる。⁽⁵⁴⁾また、劉因『四書集義精要』三六卷の卷頭にも同様の牒文が附され、その中に引用される江浙行省の劄付には、

今本書八冊を將て此に隨いて發去し、合下に仰せて照驗し、儒進官員に委自し、杭州路官と與に、上に依りて法の如く繕寫成秩し、校勘對讀して差無くんば、刊梓印布せよ。

とあり、牒文の後に、「供給」・「繕寫」・「對讀」と責任にあたる諸官吏の名前が列舉される。この本は儒學提舉司と杭州路が共同で出版した例である。

これらが出版された至順年間から至正年間（特に至正初）にかけては、杭州路下における官刻が非常に盛んに行われた時期にあたる。楊桓の撰にかかる『書學正韻』及び『六書統』・『六書統溯源』は、至大年間に刻されたものが元統年間に余謙によって重修され、後至元年間に重印されて今日に残っている。⁽⁵⁵⁾また、元統二年刊の劉敏中『中庵先生劉文簡公文集』の「江浙等處儒學提舉番吳善」の序には、

已にして左轄耿公文叔・參政王公叔能・憲副吾實吉泰公 聞きて其の事を嘉し、其の書を江浙儒司に下し、贈學羨錢を以て之を成す。

とあって、吳善自身がその出版の責任者となったことを示す。⁽⁵⁶⁾さらに、泰定元年刻の『文獻通考』も、後至元五年に余謙の重修を経た刊本が現存する。⁽⁵⁷⁾班惟志による『錢塘先賢傳贊』の出版もあった。⁽⁵⁸⁾つまり、江浙行省の中心地における出版が盛んになったこの時期に、その盛んな出版活動を、儒學提舉司が支えていたことがわかる。特に、余謙は翰林應奉から江浙儒學提舉として赴任し、さまざまな文化活動、とりわけ、出版活動を強力に推し進めた。その様子は、黃公紹・熊忠『古今韻會舉要』の李朮魯獅序（李朮魯獅『菊潭集』卷二にも所收）に、

文宗皇帝 奎章閣に御し、昭武黃氏の韻會舉要の寫本を得。至順二年春、應奉翰林文字臣余謙に敕して校正せしめ、明年夏、上進し、賜いて其功を旌わす。余氏 今江浙に提學たりて、書質せらるるを以て、始めて其の刊正補削の根據苟にせざるを知る。……余氏 文臣を以て詔を奉りて誤を正すは、令續なり。提舉に來りて其の書を鋟むを謀るは、義學なり。

とある。中央で校正にあたった『古今韻會舉要』を、異動してきた江南で印刷しているのである。同時期に副提舉に就いていたのは『國朝文類』の校正にあたった陳旅であり、先にあげた『國朝文類』以外でも、周權『此山先生詩集』一〇巻の編集に携わったことを、

此山の詩は但に簡澹和平なるのみならず、而して語は奇傳多し。予 校選を爲すが故に深く之を知るなり。

と述べている。⁽⁵⁹⁾ 儒學副提舉であつた時期に、陳旅はこの『此山詩集』をはじめ、のちに彼と同じく江浙儒學提舉・副提舉になる楊翮の『佩玉齋類稿』や錢維善の『江月松風集』の序文を手がけるなど、書物の製作・出版過程に深く携わつた。文化的事業の活潑化の中で、余謙・陳旅を中心とする儒學提舉司はその一翼を擔う働きをしていたのである。

ここで、振り返って、前章の最後にあげた「元加孔子號詔碑」や「元西湖書院重修大成殿碑」に再び注目してみたい。そこでは、中央から歸つてきた余謙・陳旅が憲司や有司と協力して、儒學の記念碑をたて、西湖書院の復興にあたる様子が描かれていた。そして、その西湖書院では、まさに多くの本が校訂・出版されつつあつた。このように、儒學提舉司は、江南における教育・出版等を初めとするさまざまな活動を行い、その活動を通じて、直接的に廉訪司・行臺とも繋がりをもち、一方で、儒學教育という類似性や人事異動を通して、中央の文人たちや漢文書を扱う諸機關とも關係した。儒學提舉は、翰林院・集賢院や國子學の官になつた者たちと並び、儒學的教養を基礎とする知識人たちの代表として、儒教文化を擔う役割を課せられていたといえよう。

おわりに

江南を中心に設けられた儒學提舉司の役割は、「學校」という組織に關わる利權の體現者として終始機能した。時期ごとにその重點は變化していき、元初には、税役免除特權を守る代表者・代辯者として、その後儒學を道教や佛教勢力から守る盾として機能していった。科擧の停止や復活とともに學校の位置づけが變化するのにつれて、その重點は微妙に變化しただろう。しかし、それでも、地方においては文化的教養を基盤とする唯一の役職として、儒學を奉ずる人々を代表する誇りをもてる地位にあつた。元末に儒學副提舉についた鄭元祐は、混亂する情勢の中で、儒學提舉司を「文臺なり、儒者の職なり」として、文人にとって名譽ある地位だと認めて、その官に赴いている。⁽⁶⁰⁾

明の太祖朱元璋は、至正二〇年(庚子、一三六〇)に、浙東の宋濂を招いて儒學提舉に任命し、皇太子に經書を教授させ

た。⁽⁶¹⁾當時の宋濂の立場に照らすと、學問を代表する人物に與える地位として、儒學提舉が選擇されたのがわかる。宋濂に與えられたこの儒學提舉という地位は、就任時にこそ校理などの屬官まで整えられたが、その後は繼續しなかった。つまり、彼を迎えるにあたつての特別な稱號であつた。漢人儒人を代表する人物を政權に參畫させるにあたつて最も相應で名譽ある官職としての儒學提舉司というのが、元一代を通じて形成された儒學提舉司の位置を代辯するものといえよう。

参考文献

- 阿部一九七六 阿部隆一『中國訪書志』汲古書院。
植松一九八九 植松正『元代江南の地方官任用について』、『法制史研究』三八（のち、同『元代江南政治社會史研究』汲古書院、一九九七年所收）。
植松一九九一 植松正『元代江南行省宰相考』、『香川大學教育學部研究報告』第一部八三、（のち、同前書所收）。
王二〇〇〇a 王培華『元朝東吳士人領袖鄭元祐』、『文史知識』二〇〇〇—一一。
王二〇〇〇b 王炳照・郭齊家主編『中國教育史研究・宋元分卷』華東師範大學出版社。
太田一九八八 太田彌一郎『元朝の私租減免令をめぐって』、『東北大學東洋史論集』三。
郭二〇〇〇 郭聲波『宋朝官方文化機構研究』天地出版社。
許二〇〇一 許守泯『元代江南士人的社會網絡——以金華黃潛爲例』、蕭啓慶主編『蒙元的歷史與文化——蒙元史學術研討會論文集』（下）臺灣學生書局。
櫻井一九九八 櫻井智美『趙孟頫の活動とその背景』、『東洋史研究』五六—四。
櫻井二〇〇〇 櫻井智美『元代集賢院の設立』、『史林』八三—三。
櫻井二〇〇二 櫻井智美『儒學提舉司の起源と變遷——兼論宋金の學校管理——』、『阪南論集』（人文・自然科學編）三七—四。
徐二〇〇〇 徐梓『元代書院研究』社會科學文獻出版社。
孫一九五三 孫楷第『元曲家攷略』上雜出版社。
張一九八八 張帆『元代翰林國史院與漢族儒士』、『北京大學學報』（哲學社會科學版）一九八八—五。
陳一九九三 陳高華『元代的地方官學』、『元史論叢』五。

潘一九九六 潘國允・趙坤娟『蒙元版刻綜錄』内蒙古大學出版社。

宮一九九八 宮紀子『孝經直解』の出版とその時代、『中國文學報』五六。

宮一九九九 宮紀子「大德十一年「加封孔子制誥」をめぐる諸問題」、『中國——社會と文化——』一四。

宮二〇〇一 宮紀子「程復心『四書章圖』出版始末攷——大元ウルス治下における江南文人の保舉——」、「内陸アジア言語の研究」一六。

森田一九九二 森田憲司『廟學典禮』成立考、『奈良史學』一〇。

李二〇〇〇a 李治安『行省制度研究』南開大學出版社。

李二〇〇〇b 李治安「元代肅政廉訪司研究（中）」、『文史』二〇〇〇—四。

李一九八一 李致忠「元代刻書述略」、『文獻』一〇（のち、上海新四軍歷史研究會印刷印鈔分會編『歷代刻書概況』印刷工業出版社、一九九一年所收）。

註

(1) 櫻井一九九八（四九—五二頁）を參照。ただ、當時は史料や先行研究への配慮が行き届かない點があり、表層的な捉え方にとどまった。また、すでに、森田一九九二（六八—七〇頁）が、『廟學典禮』について考察する中で、浙東

道儒學提舉司の沿革を述べており、特に參考になった。

(2) 李二〇〇〇a（四一—四五頁）は行省直屬の一機關として、宮二〇〇一（七四—八四頁）は保舉・出版の具體的事例に則して、それぞれ儒學提舉司の役割を論じている。

(3) 櫻井二〇〇二。以下、前稿と表現する。

(4) 『元史』の多くの「志」部分と同じく「百官志」の記述も、至順二年（一三三一）成立の『經世大典』によっていると考えられる。

(5) 前稿での考察に従い、江南における儒學提舉司整備の經緯を年表にしておく。

緯を年表にしておく。

至元一四年（一二七七） 初めての儒學提舉（葉李）

至元一七年 初めての儒學提舉司衙門（浙東道・江西）

至元二一年 儒學提舉司廢止の法令

至元二四年 行准——道に儒學提舉司設置の命令

至元三一年—元貞元年（一二九五） 儒學提舉司設置を行省の治所のみに

(6) 調査にあたっては、王德毅等『元人傳記資料索引』（中華書局、一九八七）や羅依果等『元朝人名錄』（南天書局、一九八八）などの人名索引、四庫全書全文檢索版を利用し、それらに未收の『元典章』・『通制條格』、『兩浙金石志』等の石刻書などで補った。今後も調査繼續豫定であるが、比較的見やすい資料の調査は終えており、すでに大部分は明

らかになったと考える。採用の基準として、①名前が確かなもののうち、任官年・任官地・出身地のどれか一要素がわかるものを数える。②名前が不確かなものは二要素以上を採用基準とする。③推薦や任命を受けて辞した者や赴かなかった者もとる。④明代以降の文集所載の「幾代祖」としてあげられるものについては、元代の史料に記載がなく、名が某とされるなど蓋然性の低い者は除く。

- (7) 年號と西曆の對照について示しておく。至元一四(一二七七)、元貞元(一二九五)、大德元(一二九七)、至大元(一三〇八)、皇慶元(一三二二)、延祐元(一三三四)、泰定元(一三三四)、至順元(一三三〇)、元統元(一三三三)、後至元(一三三五)、至正元(一三四一)。

- (8) 中書省やそれ以外の行省の任官者については別の機會に論じたい。

- (9) 櫻井二〇〇二(四五頁)。前稿では、葉李が「御史中丞に遷り商議中書省事を兼ねることになった」のを以て儒學提舉が終わったとした。確かに、儒學提舉という肩書きはこの時点で消えていたはずだが、葉李はこの御史中丞を辭しており、實際にその後就いたのは尙書左丞である。前稿では不十分な表現であったことを、ここで訂正したい。また、至元二一年の儒學提舉廢止に伴って、葉李の職務はなくなったかもしれないが、その肩書きはそのままだったと考える。

- (10) 本貫と居所が異なる場合、本人または父の出身地を採用し、必ずしも本貫をとらない。

- (11) 同じ至元二三年四月に江東道儒學提舉司が設置されている(『至正金陵新志』卷六「歷代官制」)ことから、儒學提舉司復置の明文はまだ見られぬものの、すでに再設置され始めていた可能性もある。

- (12) 郭二〇〇〇(一六五—一六六頁)を参照。

- (13) 弟の李鎮が副提舉になったのは、至元二二年の崔瑒の「求賢」をきっかけとした。彼も同じ機會を得たか、或いは、程鉅夫のいわゆる「江南搜訪」と關係があるだろう。

- (14) 宮一九九八(四四頁)を参照。

- (15) 『國立中央圖書館善本序跋集錄』(國立中央圖書館、一九九四)集部六所載の武序は「僕」字を脱しており、彼が就任したことがわからない。

- (16) 『新刊類篇歷學三場文選』甲集卷六などには、天曆二年の江浙行省郷試の考試官として「考官楊待制剛中」とある。
- (17) 許二〇〇一(六五七頁)でも、至正元年から二年間就任したとされる。

- (18) 『蛻菴集』卷二に「戊子正月連雪苦寒答段助教天祐吉甫二首」がある。

- (19) 『說文字原』に序して、「至正十五年龍集乙未三月既望奉直大夫國子監丞京兆宇文公諒敘」と書いている。

- (20) 鄭元祐については、王二〇〇〇aが詳しい。

- (21) 孫一九五三(九一—九三頁)を参照。

- (22) 『萬曆杭州府志』卷九には、もう一人「趙孟聖」という提舉があげられるが、その詳細を調べることができなかったで、リストには加えない。

(23) 『西巖集』卷四に「西岡李存畊弟景安訪余山中以詩爲別」とあり、存畊は李鎮の景安は李浩の字である。

(24) 『至順鎮江志』卷一一「學校」にも、元貞年に淮海書院が整備された際に、陳友龍が文章を書いたという記事を載せる。

(25) 『劉基集』（兩浙作家文叢、浙江古籍出版社、一九九九）附錄四「劉基年表」を参照。

(26) 『元史』卷四五「順帝本紀八」至正一八年九月壬寅の條。
(27) 『萬曆杭州府志』卷九には、また「孔洙（衢州人）」とあるが、彼が至元一九年に就いたのは浙東道學校事であり、儒學提舉とは性格を異にする（前稿注（33）を参照）。さらに、同書卷六一には、成化府志の人物採録基準を批判して別基準で就任者を列舉するが、段天祐を抜き宇文公諒を加えた、やはり一〇人にとどまる。

(28) 至元二〇年代までは、江浙行省ではなく江淮行省でくられる時期もあり、その間、福建行省がたてられたこともあった。元末にも、至正一六年以降、再び福建行省が建てられる。吳廷燮『元行省丞相平章政事年表』を参照。

(29) 副提舉就任時の散官が將仕佐郎（從八）である者が四人いることから、拔擢の要素があるようだが、一方で承務郎（從六）の者もあり断定はできない。

(30) 儒學副提舉の後任としても、翰林應奉（從七）が複数見られた。

(31) 『國朝文類』卷三六、王士熙「送楊仲禮序」には、「其司文教者、曰儒學提舉。……若襄之爲是官者、吳興趙先

生・巴西鄧先生、皆由侍從出、美望孚于人人。」とあり、この序が書かれた泰定年間頃には、趙孟頫と鄧文原が代表例だと認識された。

(32) 前稿（四五頁）を参照。

(33) 前稿注（43）を参照。

(34) 中書省の大部分を占める大都（路）儒學提舉は、提舉學校所（大都路學）の長官であり、地方學校を統括する儒學提舉とは別物である（前稿注（26）を参照）。河南江北行省の人物では、陳庄・武乙昌はともに荊南路にあつた南陽書院の管理と關係し、湖廣行省との關連も深い。林桂發・蔣會龍とともに元初江淮行省時期に淮東儒學提舉だつた。また、載良は元末の軍閥割據時にあたり官制はすでに混亂していた。

(35) 同恕『渠菴集』卷二「送孔提舉序」に、「自有此司垂三十年、陝西儒學僅得三人。始則集賢學士勤齋肅公、再則國子博士虛舟王公、今也聖師五十四代孫孔君弘道寔來。」とある。

(36) 至正初においても、江浙行省では學校が盛んであつたことが、劉岳申『申齋劉先生文集』卷二「送李一初江浙儒學提舉序」に、「學校至近年大壞極弊、不可復支。獨江浙以能官聞、則進士得人之效也。」と述べられている。また、元代の學校・書院の分布に關しては、徐二〇〇〇（一六二—一六八頁）を主に参照した。

(37) 植松一九九一を参照。

(38) 太田氏は、『至順鎮江志』卷一五「刺守」によつて分析

する。太田一九八八を参照。

- (39) この結果は鎮江という一地域に限られるものではなく、達魯花赤と總管に關してだけだが、『嘉靖湖州府志』卷三「古今守令表」郡守、『洪武蘇州府志』卷二〇「牧守題名」元、『萬曆杭州府志』卷一四「古今守令表」二「杭州路總管府表などにおいても、至元二〇年以降は江南出身者の就任は見られない。植松一九八九も参照。

- (40) 張一九八八(八〇頁)では、監察官と詞苑方面、特に後者には儒臣が用いられたことを強調する。儒臣とは少しずれるが、儒學提舉司も「漢族」中心であった點は同じである。

- (41) 李二〇〇〇a(四二―四三頁)、宮二〇〇一(七四―八四頁)を参照。

- (42) この權力を濫用して蓄財や使い込みを謀る質の悪い提舉儒學も見られたようで、『元典章』新集戶部「錢糧」侵盜「教授直學使學糧」には、至元二九年頃、南陽書院(江陵)の贈學錢鈔を使い込んで罷免された儒學提舉の處分例が引用されている。

- (43) 前註の案件は、元來、規定に背いて約會を行わない有司の裁きを儒學提舉司が求めたものだった。ただし、訴訟についていえば、そのすべてが儒學提舉司を通しているわけではないことは、拙稿で述べたとおりで(櫻井一九九八)、『兩浙金石志』卷一四「元嘉興路儒學正禮堂基地本末碑」では、儒學が寺院を訴えた裁判案件が儒學提舉司を通さな

- (44) 阮元『兩浙金石志』卷一五「元慶元路鄞縣學廟碑」、卷一六「元嘉興路建學碑」など多数。拙稿(櫻井一九九八)でも指摘したが、ここでは「學田錢糧」と一緒に論じたい。め、わかりにくくなっている。ここでもう一度明確に述べたい。

- (45) 例えば、同前註書卷一四「元嘉興路重修儒學碑」、卷一五「元重建南鎮廟碑」、「元西湖書院增置田記」、卷一七「元嘉興路興學學校碑」、卷一八「元鄞縣重修儒學碑」には、それぞれ江浙儒學提舉・副提舉の范霖、鄧文原、白珽、李祁、楊彝が関わっている。

- (46) 教育機關の概略については、陳一九九三、王二〇〇〇b(四四九―五〇〇頁)等を、集賢院の教育機能については、拙稿(櫻井二〇〇〇)を参照。また、『元典章』卷九「吏部三」官制三、教官「正錄教諭直學」をみると、科舉開始後である延祐四年において、學校を取り巻く關係衙門に變化は現れるが、集賢院と儒學提舉司の枠組みは保たれていることがわかる。

- (47) 『秘書監志』卷四「纂修」に、「至大四年七月二十一日、中書省奏准事内一件節該」とする同内容の記事がある。これらについては、宮二〇〇一(九五―九九頁)で検討されており、七月二日に奏上された内容が、翌月に正式發令されたという。

- (48) 『廟學典禮』卷二「正錄不與教官連署」、「儒人公事約會」などがその例となる。

- (49) 例えば、『元典章』卷六「臺綱」二「體察」察司體察等例」

に、「所至之處、勸課農桑、問民疾苦、勉勵學校、宣明教化。」とある。

- (50) 『廟學典禮』卷五「行臺治書侍御史沆呈勉勵學校時宜」にも「又累欽奉聖旨條畫、凡爲學校公事責任、廉訪司尤重。」とあり、このような記述は當時のさまざまな種類の史料に見られる。詳細は、李二〇〇bを参照。

- (51) 『成化杭州府志』卷二三「學校一」及び「兩浙金石志」卷一八「元杭州路重建廟學碑」によれば、至正一五年には王大本が、二四年には楊嗣が、それぞれ撰文する。

- (52) 「加封孔子制誥」については宮一九九九が詳しい。該碑が西湖書院に建てられたと考えるのは、跋文の書き手が西湖書院の山長であることに加え、『成化杭州府志』卷二五「學校三」仁和縣儒學の條に、「元加封至聖文宣王詔石刻、舊在西湖書院、院後改仁和學。」とあり、さらに、同書卷五八「碑碣目」には「元加封孔子詔石刻、在仁和儒學」とあって、他所に同碑がこののこるのを傳えないことによる。

- (53) 李一九八一、宮二〇〇一を参照。

- (54) 同じく西湖書院で出版された馬端臨『文獻通考』卷頭の「抄白」にも「江浙儒司校勘、得堪以傳後。」とある。

- (55) 第一章第一節での考察より、余謙の儒學提舉就任時期は至正二年までは及ばない。『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』（靜嘉

堂文庫、一九九二）解題篇（八七—九〇頁）は、後至元二・三年修なのか至正二・三年修なのか結論を保留し、潘一九九六（七四頁）では至正二年と斷定するが、至正年間ではあり得ない。阿部一九七六（C四七—五六頁）も参照。

- (56) 『牧庵集』吳善序にも、「至順壬申、公之門人翰林待制劉公時中始以公之全集自中書移命江浙、以郡縣瞻學餘錢命工鋟木、大惠後學。予時承乏提舉江浙儒學、因獲董領其事、私竊欣幸、乃與錢塘學者葉景修重加校讎、分門別類、……。」とある。

- (57) 中國古籍善本書目編輯委員會『中國古籍善本書目史部』（上海古籍出版社、一九九三）一一—一二頁を参照。

- (58) 第一章第一節の班惟志の條を参照。

- (59) 『此山詩集』陳旅序。

- (60) 鄭元祐『僑吳集』附錄、蘇大年「遂昌先生鄭君墓誌銘」。

- (61) 『宋文憲公全集』卷首二、鄭楷「翰林學士承旨嘉議大夫知制誥兼修國史兼太子贊善大夫致仕潛溪先生宋公行狀」、「明太祖實錄」卷八、庚子年三月戊子朔の條、及び閏五月丁卯の條。

〔附記〕 本稿は、平成十四年度科學研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

characters 竄 and 流 sometimes appear in place of bian-guan in some historical records from the Song period. But this does not mean that the punishments were the same. The expression *pei-liu bian-guan ren* 配流編管人 indicates a person sentenced to both punishments, in other words, subject to registered control in his place of exile.

THE SUPERVISORATE OF CONFUCIAN SCHOOLS IN THE YUAN DYNASTY: FOCUSING ON THE SUPERVISOR OF CONFUCIAN SCHOOLS IN JIANGZHE PROVINCE

SAKURAI Satomi

This article considers the post of Supervisorate of Confucian Schools 儒學提舉司, which bore the responsibility of managing regional schools during the Yuan dynasty, by examining the example of Jiangzhe. First, I carefully analyze what sort of person would have been named Supervisor of Confucian Schools 儒學提舉 and further proceed to examine the relationship to other organizations, employing the noted example of the activities of the Supervisor of Confucian Schools of Jiangzhe. The following four points have been clarified by this study.

Firstly, taking all those appointed Supervisor or Vice-Supervisor 副提舉 of Confucian Schools together (including those whom were only recommended or nominated to the posts), there were a total of 188 people, 125 of whom were named Supervisor, and sixty-three Vice Supervisor. Of these, 140, or seventy percent, were appointed in the three provinces of Jiangzhe, Jiangxi, and Huguang. In other words, the Supervisorate was in practical terms operated in these three provinces. Furthermore, the number of these officials who had come from the same three provinces numbered 134, and thus the percentage of native-born officials appointed in their own province was very high. This tendency is at odds with general trend for officials.

Secondly, there was mutual interchange between the Supervisors and Vice-Supervisors and both the central Hanlin Historiographic Academy 翰林國史院 and the Directorate of Education 國子監. Furthermore, the Supervisorate of Confucian Schools might correspond directly with the central Directorate of Education and the Academy of Scholarly Worthies 集賢院. Although posted in the provinces, these officials were capable of fully recognizing the intent of the center and also upholding policies linked to the central government.

Thirdly, the Supervisorate played a central role in government led printing activities in the provinces. During the period of heightened cultural activity, including publishing, which occurred from the Yuantong through the first of the Zhiyuan eras, the Supervisorate was actively involved in such activities, particularly in Hangzhou.

Fourthly, the fact that natives of the province were chiefly employed in the local administrative offices was exceptional, and they maintained firm links with the Surveillance Commission 監司, regardless of the provincial government to which they were attached. Through its social and cultural activities of constructing schools, publishing, and promoting talented people, the Supervisorate was situated in a position supporting the formation of culture in the provinces during the Yuan dynasty together with the organs of state supervision.

THE DISCOURSE ON THE *SHAYKH* IN CHINESE ISLAMIC LITERATURE AND ITS BACKGROUND

NAKANISHI Tatsuya

Works of Chinese Islamic literature that frequently came to be written in the time of the late-Ming and Qing dynasties were translations of the contents of Arabic and Persian literature into Chinese, and this body of literature might lead us to suppose that the Sinification of Islam had occurred (a departure from the original meaning of the texts resulting from the authors' attempts to write to suit the Chinese environment and of the influence of the ideological permeation of the three faiths, Buddhism, Confucianism and Daoism,). Heretofore, certain elements of Sinification in regard to the theory of Sufism have to a certain extent been made clear, but those aspects concerned with practical application of various themes have hardly been addressed. Thus I have examined those aspects and the background of this Sinification in terms of the arguments concerning the *shaykh*, the leader of Sufism, in Chinese Islamic literature and have come to the following conclusions.

Because it was rare that anyone might be identified a shaykh in the sphere of Wang Dai-yu 王岱輿, he affirmed that there were exceptions to principle that a shaykh was absolutely necessary, in opposition to the teaching of the *Mirṣād al-Tbād*, the text which he had used. This position, however, corresponded with the teachings of the *Maqṣad-i Aqṣā*, which was widely read in China, on the possibility